

雲の手通信

2006年7月

第26号

発行人； 茶木 登茂一

====このお便りは私が担当している太極拳教室の皆さんに毎月お届けしています。====

健康妄語録 お別れの力強い握手……

瑞江鶴の会の会員の方から5月16日付けの東京新聞(夕刊)のコピーをいただきました。それは帯津良一先生(帯津三敬病院名誉院長)の講演録で、帯津先生が楊名時先生の最後を看取られたときのご様子について話されたものですが、たいへん感銘を受けました。おりしも7月3日は楊名時先生の一周忌ということでもありますので、ここにその記事の一部をご紹介します。

『……(楊名時先生は)死ぬのも生きるのもあるがままにという態度で、執着はまったくなく、やはり「死ぬときは、あなたの病院で」と言われて、私の方がプレッシャーを感じていました。

最後の病床で、意識もさだかでなくなったとき、家族一人一人と、そして私と握手をして間もなく亡くなりました。そのときの握手がものすごく力強かったんですね。この力はどこから出てきたんだろう、と私は考え込みました。

……ヘルマンヘッセの詩の一節があります。「よろこんで朽ち果て万有の中に崩壊してゆく」

楊名時先生の生き方、死に方が、まさにこの通りだったんですね。死から目をそむけている人には絶対に真似ができません。あの握手の意味を、私はいまこんなふうに考えるんです。

今日死ぬと分かっている、するのが養生であり、生命の躍動です。そして、いよいよ生の終わりが近づいてくる。そのときこそ、加速を付け、ものすごい勢いで死後の世界へ突き進んで行く。「ずるずる」じゃなくて「ダダーン！」と、向こうの人がビックリするくらいの猛烈な勢いで飛び込んで行くのです。』

最後の4行はちょっと分かりにくいかも知れませんが、帯津先生独特の死生感、つまり人間は死によって(その生命エネルギーが)大虚空へ帰って行くのだというものです。このご説はたいへん面白いものですので、またいずれ機会を見てご紹介したいと思います。

再掲・用語解説 び かいがんしょう 眉開眼笑

「慈眉善目じびぜんもく」という言葉もあり、いずれも穏やかで優しく澄んだ眼差し(の人)を意味するそうです。これは私の太極拳の師でもある中野完二先生(日本健康太極拳協会副理事長・東京都支部長)が教室で説明してくれたものです。「健康・友好・平和」をモットーとする楊名時健康太極拳はまさにこのような“善い顔になるために”するのですというご説明がありました。太極拳は健康に良いからやっているというのがおおかたの認識かと思いますが、究極はまさに“善い顔になるために”ということなので、心・息・動の一致を心がけて長い間お仲間といっしょに練習を積み重ねてゆくと自然自然に善い顔に変わってゆくのでしょうか。楊名時先生がご本にもよく書かれている『健康即幸福・幸福即健康』というお言葉に相通じるものであると思います。

中野先生のお話には続きがありました。それは花森安治さんが『服飾読本』に書かれた「あらゆるものが発達した現代でも目の冴え、光りは装うことは出来ない」という言葉を、中野先生があるとき歌人の篠弘先生に話されたところ、篠先生が『これは面白い。いただきます。』と言ってさっそく短歌に作られたというお話でした。それは――

まなざ 眼差しの冴えは装うすべなしと花森安治つきつめて言う

という歌だそうです。ところでまったくの蛇足で恐縮ですが、篠弘先生はたまたま「ジパングクラブ」会員誌の短歌欄の選者もされておられて、私の旅の歌も2度ほど採っていただいています。

旅をうたい拳を詠む

中国の広州・桂林・上海へ4泊5日の短い旅をしてきました。あいにくむこうも梅雨のような天候でしたが、観光には支障も無く桂林の灑江下りなどを楽しんで来ました。桂林は20年ぶりに訪れましたが、その変貌、発展振りには驚かされました。

ようやくに連日の雨上がるらし青空のぞく今朝の桂林
雲はらむ奇怪なる峰連なりて河港へ向かう我ら迎えり



【上；灑江下りの風景】

頭ち来たりまた隠れゆく変幻の
奇峰怪峰倦まず眺める
例えればシンフォニーを聞く如し
遠近高低四囲の峰々
川の曲ひとつ廻ればたちまちに
新しき景また迫りくる



【上；水郷の観光村「世外桃源」】

劉三姐の唄は川面に揺蕩いて
竹のいかだとともに流れる
あぜ道をカルガモの子ら群れ歩み
子犬がまるぶ梅雨晴れの村

【右；筏で唄う少数民族壮族の歌姫】



遊印遊語 楽しむに如かず

孔子の論語の一節「知之者不如好之者 好之者不如樂之者」（之を知る者は之を好む者に如かず、之を好む者は之を楽しむ者に如かず）【雍也第六】から採ったものです。楊名時先生も好んで書に書いておられたということを手野完二先生から教えていただきました。太極拳もこのようにありたいということでしたが、まさに楊名時太極拳の真髓を言い表しているのではないのでしょうか。



これを彫った印材【左の写真】は1992年1月に孔子の故里「曲阜」を訪れたときにたまたま手に入れたものですが、14年目の今、ようやく印材の出所にふさわしい成句を彫ることが出来ました。



【お断り；8月は各教室夏休みのため、「雲の手通信」もお休みします。】